



TITLE:

清代後期の雲南回民運動について

AUTHOR(S):

神戸, 輝夫

CITATION:

神戸, 輝夫. 清代後期の雲南回民運動について. 東洋史研究 1970, 29(2-3): 246-274

ISSUE DATE:

1970-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152819>

RIGHT:

清代後期の雲南回民運動について

神戸輝夫

はじめに

一 清朝統治の弛緩

(一) 秘密結社

(二) 遊匪と練勇

二 回民運動の展開——その一

(一) 鬭争の再燃

(二) 運動の性格

三 回民運動の展開——その二

(一) 同治元年（一八六二）まで

(二) 同治十二年（一八七三）まで

(三) 杜文秀政權

おわりに

はじめに

清代後期、雲南省に展開された回民運動は、同時代におこった太平天國運動を頂點とする各地の反清・反封建鬭争の一

環である。本稿では、清朝封建體制が國內外から大きな打撃を受け、中國社會が漸次半封建・半殖民地社會に改變されていく時期の階級矛盾の爆發の一つとして回民運動をとらえ、運動の背景となった雲南省社會の狀態と戰史としての回民運動を考察してみたい。⁽¹⁾

一 清朝統治の弛緩

(一) 祕密結社

清代中期以降、白蓮教や天地會、三合會に代表される祕密結社は、それらに加えられた嚴しい監視と彈壓にもかかわらず、華北・華中・華南の各地に發展していく形勢にあった。更に嘉慶年間末期から哥老會が胎動はじめ、四川・貴州・湖南各省へと擴大していく形勢にあった。雲南省は、四川・貴州・廣西等の省と界を接し、それぞれから祕密結社の浸透をうけたと考えられる。

道光九年（一八二九）三月、戴三錫は次のように上奏している。

竊獲南川縣滋事匪犯、供稱首犯羅聲甫、於道光八年九月、與同里之韋紹閑自外回歸、聲言在雲南開化府、拜從民人陶月三、學得符呪、用清水一盃、燒然檀香、畫符念呪、喫水之人、即有神附體、自能舞弄拳棒、名爲少林神打、⁽²⁾

羅聲甫が符呪を學んだ陶月三は陶三老とも呼ばれ、開化府の麻柳坡地方の「種地鄉民」である。道光十二年六月（一八三〇）、雲貴總督阮元は、廣南府寶寧縣の「匪徒平四」を審擬して次のように上奏した。

查平四於道光十年十二月間、赴廣西百色地方貿易、有廣西人劉阿大傳授添弟會、用紅布一塊、上寫麒麟麒麟麒麟霖霖露霖等字、作入會憑據、旋因生意折本、回至原籍、起意糾入、結拜添弟會、描寫號片斂錢、並可出外搶却、即邀黃亞岡等三十八人、拜盟屬實、⁽³⁾

寶寧縣は廣西省との境界に近く、百色は雲南銅の搬出ルートにもあたっていた。また添弟會は三合會の別名(舊名)である。道光十一年(一八三一)九月、御史馮贊勳の上奏によれば、廣東等の省には秘密結社三合會(添弟會)が組織されており、その一黨は「五房」に分れ、福建―長房、廣東―二房、雲南―三房、湖廣―四房、浙江―五房であると述べている。これからみても、當時雲南省は三合會の重要地域となっていたことが察せられる。

道光十八年(一八三八)六月、御史蔡瓊は、雲南省の東部(迤東)、西部(迤西)の鑛廠では「匪徒聚衆、結拜兄弟、魚肉鄉鄰」と指摘している。秘密結社の浸透は、雲南へ流入する貧民の増大と密接な関係をもっていると考えられるが、雲南省の各種鑛廠はかかる流民のたまり場であり、雲南の諺に「香成らずんば廠ならず」といわれるように秘密結社の據點であった。

道光十九年(一八三九)六月、順寧府猛緬廳におこった回民の虐殺事件の首謀者には、「本地豪棍」・「惡衿」といわれる漢民郷紳と「川湖江西客長」といわれる鑛廠の有力者、更には參將・守備・「滿刑吏」・「參將稿房」等の地方官吏がおり、彼らは回民攻撃に先立ち、「壽佛寺」に集まり「結黨」していた。このようないくつかの例にみられるように、道光中期以降、各地に秘密結社の組織が擴大されていったようである。道光末期、雲貴總督の任にあった賀長齡もこうした状況を察し、雲南の迤西には早くから「燒香結盟」の「惡習」があると指摘している。なかでも、永昌府保山縣では「牛叢會」という漢民の自衛組織が強い力をもっていた。『續雲南通志稿』は、道光十三年(一八三三)「牛叢會」が地方の實權をにぎり、知府や知縣の統治を受けなかったことを記している。また「永昌府保山縣漢回互闘及杜文秀實行革命之緣起」によると、道光二十年(一八四〇)ごろから保山縣の漢民の間には「燒香結盟」して會を作るものが多くあり、「香把會」と呼ばれていると述べている。おそらく「牛叢會」と「香把會」との間には共通するものがあつたと思われる。「香把會」は哥老會と同一ではないが、それに似せて組織され、保山縣城内外の八カ處に分れて「八把香哥弟」と稱していた。香把會には「強悍少年・勢豪劣衿」をはじめ、城郷の漢民ほとんどが組織されていたようである。香把會を弾壓した林則徐は、

「七哨の匪徒、數十萬人を下らず、つねに衆を聚むとき、牛角をもつて一吹すれば、蜂擁して至らざるなし」と述べている。各「把香」には「大爺」と呼ばれる首領が置かれたが、とくに城外板橋街の「萬大爺」はもっとも勢力が強かった。

「萬大爺」が外出するときは、總督の儀衛にならない、八人がかつぐ轎にのり、虎皮に坐し金獅を踏み、前後五、六百に擁護されていたといわれる。⁽¹¹⁾ 賀長齡も保山縣の祕密結社の動きについて報告しているが、それによれば、武生萬林桂・文生張杰・監生萬重らが中心となって「尊光寺」に集まり、神前で「燒香發誓」し、萬林桂が「盟正」となり、板橋街の漢民に「盟正」に従うよう求めたと述べている。⁽¹²⁾ そして、彼らの目的が「郷里を壓服する」ことにあり、尊光寺に「刑具」を備え、郷民を「欺壓」したといっている。⁽¹³⁾ おそらくこの萬林桂は、先述の「萬大爺」と同一人であろう。賀長齡はまた、この他にも、永昌府では四川成都の回民「道人門應奎」が、「賣卜渡日」し、「素より拳棒を習い術あり、よく槍礮を封ず、又變幻を善くし、官兵を怕れず」と謠言し回民を組織しようとしたことも傳えている。⁽¹⁴⁾

道光二十五年（一八四五）九月の保山縣の回民殺害は、この香把會が中心になっていたものであるが、萬林桂の死後、香把會をひきいた沈聚成、沈振達父子はその首謀者であった。また彼らは、「妖匪金混秋」を師父とあおいでいた。金混秋は、「野夷金老蚌雞」に符呪や「緊皮藥」の配合を學んだといわれ、「鐵盛」をかぶって賣藥したので「鐵帽子」とあだ名されていたという。その「緊皮藥」というのは、戦闘の時に服用すると皮肉が縮聚し、勇力が倍加して刀槍をもってしても切りつけることができないといわれているものである。その所有物には、緬字經卷五束・緬佛一尊・念珠一串・鐵帽銅帽各一・銅贏一個・鳥槍七桿・火藥一包・藥礮藥葫蘆各一個・藥物・木印一顆があったという。⁽¹⁵⁾

『騰越杜亂紀實』によれば、騰越廳にも「把黨」と呼ばれる祕密結社があり、地棍・劣衿がその中心になっていたというから、これも香把會と関係があるかもしれない。

道光二十八年（一八四八）一月、彌渡でおこった漢民富戸の掠奪、通判衙署への襲撃事件も祕密結社によるものである。⁽¹⁷⁾ 事件の首謀者は「外來匪徒」四川回民沙金龍・沙玉龍・漢民古明發と「内地匪徒」彌渡回民麻汝淮・麻春融・黃中であ

り、彼らは四川・陝西・貴州各省や雲南の趙州・永北・姚州から漢・回六・七百名を集めている。彼らは彌渡北門外の「五顯宮」で「燒香結拜、歃血飲酒」し、これを「進山」と稱し、會を「九排」に分け「總領」（大爺・二爺・五爺・么大・滿大・滿五・十爺・么五・小老）をたて、會を終ると「出山」と稱して掠奪に出ている。その組織形態からみて、おそらくこれは哥老會であろう。そして、この場合には、回・漢がともに組織されるという注目すべき状況もみられる。

『碌雲紀事稿』⁽¹⁵⁾には、新興州では、咸豐七年（一八五七）にいたる十數年、「道人湯朝陽」が夜になると壇を設け「煉法」し、鄉村の「愚民」を誘って「起會結盟」し六千餘人を得たと傳え、これにはまた、「江西人劉神仙」も参加し、『水滸傳』の「宋江三十六天罡」にならって生員を入會させようとしたと述べている。

以上の數例にもみられたように、今や雲南の各地方に各種の祕密結社が浸透してきており、それらは鑛廠にかぎらず、廣く鄉村内部にもくいこんできている。或るものは、地方官の統治を公然と排し、自ら「郷里を壓服」していく状況もみられた。また、それらのいくつかは、回民攻撃の中心にもなっており、いわゆる「漢・回互闘」と稱される漢民と回民の械闘が、單純に兩者の械闘としていきれぬ要素をもっていることを示している。しかも重要なことは、これら祕密結社の行動にたいし、清朝地方官は、これを十分に統治する力をもち得ない場合が多く、その行動を默認し、あまつさえ「印結」（保證書）を與え回民の虐殺を公認したことも稀ではなかったのである。

(二) 遊匪と練勇

雲南省にはすでに清初から各地の鑛廠を目的に流れこむ貧民の群がみられたが、その後も各地の地方志が指摘するよう嘉慶・道光年間には、この現象は更に顯著なものとなってきた。流民の多くは貧窮農民であり、「瘴郷」といわれる邊境の瘠土の開墾に、或は各種鑛廠の下層勞働（砂丁・爐丁）に従事したり、夷地（少數民族居住地）に入り小規模な商販に従事していた。とくに鑛廠は流民のたまり場であり種種雑多なものが入りこんでいた。たとえば、林則徐は、「査

するに向來廠上の人、殷實良善の者什の一、獷悍詭譎の者什の九、又廠中極めて燒香結盟の習を興す⁽¹⁹⁾」と述べ、鑛廠に巢食うものにとって秘密結社はあたりまえになっていたのである。従つて雲南の諺に「香なくば廠ならず」といわれたのである。

道光二十六年（一八四六）六月、雲貴總督賀長齡は、「近年廠務漸く疲るに因り、四外の遊匪各處に散在す、漢回夙嫌未だ釋けず、偶々爭端あらば、遊匪の事を好む者、漢民に愆患するにあらざれば、即ち回民に附和す⁽²⁰⁾」と述べ、鑛廠の疲弊とともに「遊匪」が増大し、治安を亂す中心になってきたことを指摘している。とくに道光末から咸豐初めにかけて、隣省廣西で太平天國運動が燃え上り雲南と中央との連絡が途絶えがちになるなかで、銅の運送にも支障をきたし「銅本」、「運費」約八十萬兩が停滯してきている。雲南の鑛廠は、「爐戸砂丁、類皆貧民、不能自措工本、頼有預領官銀、資其攻採⁽²¹⁾」といわれ、「地方政府から『工本』の前貸を受ける事が多く⁽²²⁾」、「雲南の場合は、それが定則化されていた⁽²³⁾」。従つて「工本」の不足は鑛廠の閉鎖に直結し、「現今久しく工本無く、鑛戸・砂丁均しく業を歇し、流れて匪となる、是を以て賊愈多く、課愈少なし⁽²⁴⁾」といわれるように鑛山勞働者の失職するものが多い状況になってきた。

道光二十七年（一八四七）雲貴總督李星沅は、「是に於て回民の狼戾なる者、愈匪と結んで心腹となり、以て其の強横を肆にす。漢民の狡黠なる者、亦匪に藉り爪牙と爲り、以て訛索を巧にす。各路各廠の遊匪、因て以て利と爲し、其の之く所に任かす。人衆ければ數として稽すべく無し、地廣ければ勢として禁じ易すからず、最も憐憫に堪えん所の者は、漢回殷實の戸と良善の民のみ⁽²⁵⁾」と述べ、「遊匪」が「富戸」を對象に、「保家錢」・「買命錢」といった名目で掠奪すると指摘している。従つて、「臣故に曰く、回を治すには必ず匪を治し、匪治まらざれば回治まらず、即ち漢も亦治まらざる也⁽²⁶⁾」と「遊匪」對策を強調する。李星沅に代り、雲南統治の期待を擔つて登場した林則徐も、雲南各地に瀰漫する「遊匪」を分析し「外匪」・「内匪」に分けてこれをとらえ、その對策を考えようとしている。「いわゆる外匪なる者は、本より無籍の遊民に係る。自ら回たると稱して、未だ必ずしも眞回ならず、自ら漢たると稱して、未だ必ずしも眞漢ならず、何處に

も槍殺し、即ち何處にも随い兇を助く」と指摘するのが「外匪」である。「其のいわゆる内匪なる者は、漢回疆を同じくするが如くして居り、分に安んず者は良、事を生ず者は即ち匪たり」と指摘するのが「内匪」である。林則徐は「外匪」の對策としては保甲の強化をあげ、「内匪」の對策としては漢・回を差別せず、各々の有力者、漢民には「紳衿・耆宿」回民には「掌教・頭人」を招いて相互に「章程を議立」させて和睦につとめさせることを心がけている。

林則徐によって「内匪」とみなされた一つに、先述の保山縣の「香把會」という秘密結社がある。「香把會」にみられたように、彼ら秘密結社は鄉村内部に組織をもつて深く食いこみ、地方官の統治を排除するという状態を各地に現出させていたと考えられる。これを統治せんとする清朝では、今や江南全域に擴大しつつあった太平天國運動の對策に必死であり、雲南からも「連年奉調出師」し、その營兵がきわめて手薄になっていた。また、雲南の軍餉は毎年約七十三萬七千餘兩であるが、このうち四十數萬兩を廣東・浙江等からの「協餉銀」に頼っているため、太平天國運動の發展はまた「協餉銀」の到來を不可能にした。しかも乏しい軍餉から十四萬餘兩を、隣省貴州でおこった苗族の亂の鎮壓のために送らねばならなかった。

同治元年（一八六二）五月、署雲貴總督潘鐸は、「民養を失えば匪となり、兵養を失えば官に抗す、漸く積りて十年、すでに挽救し難く、兵足らざれば練を募る、餉足らざれば勸捐す、其の流弊更に言うべからず」と述べるように、道光末から咸豐年間にかけて雲南の營制は解體寸前にあり、「遊匪」にたいする効果的な對策もほとんどなされ得ない狀況にあった。そこで、營兵の不足を補い、軍餉の不足をまぬがれるために計畫されたのが勇丁・練丁の招募とその費用の捐出である。

勇丁には、鑛廠から析出された砂丁や歸營不能の兵丁が組織された。各營の兵勇には、銀兩と米三斗（毎月）が支給されたが、この月米の調達は、四川省の「津貼」、貴州省の「義穀」の制にならない「釐穀」として、「成熟田畝」より「約十分抽其二」という制度でおこなわれた。⁽³¹⁾

次に團練であるが、道光二十六年（一八四六）、雲貴總督李星沅は「附奏舉團練片子」⁽³²⁾において、雲南の地理的狀況からして團練の組織による「遊匪」對策を提言していた。咸豐六年（一八五六）六月、巡撫舒興阿は、營兵の不足が深刻であるから團練の推進は「權宜之計」と述べ、總督恆春も、中央から特派された兵部侍郎黃琮、江西道御史寶璋、左江鎮總兵周鳳岐をして省城に「團練總局」を設け、各府廳州縣から大規模な練丁の募集をやり、約一萬餘人を招募している。恆春自殺の後、總督に任じた吳振斌は、咸豐七年（一八五七）十月、「團練總局」について述べ、ここでは練餉が數萬兩必要であり、經費の捻出は大仕事であること、練丁になっているものには無賴の徒が多いこと、練頭は地方官の統制に服さないこととの諸點をあげて、「總局」は「大患」の因であると反對している。⁽³⁴⁾しかし、當時、次第に雲南全域に組織されてくる回民運動の發展からして、清朝では團練を強化することはあっても、これを廢止することは不可能であった。

團練の問題で重要なのは、吳振斌も指摘したように無賴の徒が多かったことである。すなわち、練丁に招募したもののなかには、清朝地方官から「遊匪」として指摘されていたものも多かったのである。道光末、姚州白鹽井の提舉李承基が私に練丁を集めたことがあったが、その練丁の多くは「外來無業遊民」であった。⁽³⁵⁾また、練頭・練目は、そうした「遊匪」の指導者でもある。今や彼らは、地方官の統制に服さず自由に行動した。同治五年（一八六六）三月、雲貴總督勞崇光は練目の動きについて、「練を養い自衛し、公事を把事し、詞訟に干預し、ほしいままに錢糧釐稅を收す、捐諭を勒派し、任意妄爲、敢て誰何するなし、其の地方を保守するに、功なしとはなさず、而して其の跋扈橫行、亦はなはだ狀なし」と述べている。⁽³⁶⁾練頭のなかでも、のち副將に擢せられた何有保、その養子で總兵に擢せられた何自清は、督撫ですら二人を統御できなかったという。何有保は前署曲靖府事許濂・通海縣知縣雷炎・署楚雄協鄭洪順・遊擊施嘉瑞・巡捕高青雲ら清朝文武官員二十餘人を殺害していた。

また團練を維持するための練餉は、地方の紳民の捐出に頼っていたが、練丁・練目は「索餉」と稱し、暴力的に鄉村を掠奪した。同治元年（一八六二）前雲貴總督張亮基は、「分に安んぜざるの徒、即ち勦回の名に假り、民に供給を迫る。民

間草根を食し、樹皮を^{くも}餐う、糧を^へ省し以て練に供す、練乃ち鷄豚を索し、牛馬什物を掠し、多方以て民を病す⁽³⁷⁾」
 いる。練目・練丁のみならず、兵丁もまた郷村において米石を掠奪したのである。

團練・兵勇の掠奪と暴虐に、「百姓困苦流離し、毫も生計なし⁽³⁸⁾」とか「地方の紳民怨恨す⁽³⁹⁾」といわれ、今や「良民ことごとく散じて賊となり、或は相い率いて練とならん⁽⁴⁰⁾」と指摘される状態に陥つたのである。

二 回民運動の展開——その一

(一) 鬭争の再燃

道光二十五年（一八四五）九月、永昌府保山縣の祕密結社「香把會」と地方官員との結託による回民襲撃に抗し、回民は「永昌回民檄文⁽⁴¹⁾」を出すとともに、遠く四川・陝西・甘肅省からの回民の應援を得て保山縣城外猛庭寨に結集した。この回民運動は、陝西回民黃巴巴の指導のもとに道光二十七年（一八四七）初期まで續いた。この期雲貴總督の任にあった賀長齡・李星沅は一方的な「勦回」政策をとり事件を更に紛糾させた。事件の一應の結着は代つて雲貴總督に任ぜられた林則徐の「但分良莠、不分漢回」という政策と「勇練・土民夷練」一萬餘による「香把會」への彈壓によりはじめてなしとげられた。林則徐は事件の再發を防ぐため漢・回の紳衿・掌教に曉諭して「勸解調和」をさせた。同時に、漢・回の雜居を避けるために回民二百餘戸を保山縣城外の官乃山へ強制移住させる措置をとった。林則徐はこの移住について「該回民等ますます官の保護を爲し、以て久しく生業に安ずを知り、陸續として去者數起あり、自ら樂土たるを知り、彼此あい招くに係る⁽⁴²⁾」と述べ、回民が進んで移住したかのように記している。しかし、回民側の記録によると官乃山は「烟瘴之地」であり、回民はその「産業」を價をやすくして強制的に漢民に賣らされ、「内地」に居住するのを許されなかったといっている⁽⁴³⁾。實際、咸豐五年（一八五五）十月、陝西道監察御史陳慶松は「永昌膏腴の地、多く回子の所有たり、平定よ

り後、回子をもつて徼外に驅逐す、腴田盡く民人に與り、回子其の故業を失い、往往夷人に勾結し、沿邊滋擾す」と上奏するように、強制移住を嫌った回民は「衣食逼迫し、流れて盜竊となる者、まま之れ有り」、「回子つねに機に乗じて報復せんとする⁽⁴⁶⁾」状態がひきおこされたのである。一見「合理主義的回民政策⁽⁴⁷⁾」といわれる林則徐の統治も、右の點では、のち陝西・甘肅の回民運動を彈壓した左宗棠のとつた漢・回分離政策の先鞭をなすものでもあった。道光末期、雲南においても大きな問題になっている「遊匪」や祕密結社の浸透が更に擴大されていくなかでは回民運動の再燃は時間の問題であつた。

道光三十年（一八五〇）、迤南の他郎金廠に事件が起り新たな回民の運動を誘發していく。他郎金廠は道光末期、非常に活況をみせた。金鑛開採の廠商（鑛商）になつてしたのは、回民馬綱・馬亮・納福海・馬明鑑・保泰・金滿斗・金滿堂・漢民遲鵬萬・楊新民らであり、どちらかといえば回民の廠商の勢力が強かつたといえる。このため、「廠地賭徒」たる周鐵嘴・周四鎌刀・李經文・潘德は、郷里（臨安府建水縣西莊）の「大紳」黃鶴年に、「金廠の美利、回讐斷をなす、よく回を逐し、廠を得ば、臨安必ず黃金世界に成らん⁽⁴⁸⁾」と説き金廠の占領を計畫したのである。黃鶴年は「姪武舉」黃殿魁、林五代とともに郷人五百餘で金廠を襲つたのである。回・漢廠商は「聯名」して他郎廳に救護を求めたが、「臨匪」（「建匪」の勢力に抗しえず、「かえつて政府の威嚴を失うを恐れ⁽⁴⁹⁾」傍觀したのである。回民廠紳は四人が殺され、二人は失踪し、漢民廠商二名は、漢民であるということで「不問」にされ、回民勢力は一掃された。「臨匪」の動きはどこからも管束されることなく更に擴大し、咸豐四年（一八五四）三月には石羊銀廠（南安州）に波及した。石羊銀廠の生産構造をみると、廠商として回民では武生李本開・武舉金鼎・馬金傳・馬鍾秀（白馬洞主）・馬蛟（麒麟・天倉洞主）・金標（滙寶洞主）がおり、漢民では貢生王某（王貢爺・地庫洞主）・遲某（空風洞主）・崔萬（寶持洞主）・楊雲（天發洞主）・楊興（大發洞主）・劉治元（劉裕洞主）がいた。また馬蛟は「鑛師」として鑛脈を発見する優秀な技術をもつており「財帛星」とあだ名されていた。李本開・馬金傳も「課長」も兼ねており「七長」に代表される鑛山師としては「洞長」に回民馬長年・馬彭年兄弟、「爐長」

に回民馬絆鞋、「客長」に回民馬彩・漢民顏亨泰（江西幫）、「街長」に漢民顏爾安がいた。また「買鑛」して鑛の精鍊を行なう冶金業者「爐戸」として、回民馬開林・馬中貴・馬中榮・馬萬年・馬萬九・漢民王貴・李東旭・楚發がいたが、前記の回民「碓長」馬長年兄弟も「爐戸」を兼業していた。これら廠商・七長・爐戸のもとに回・漢の砂丁（採掘労働者）・爐丁（冶金労働者）があり、その数ははつきりとわからないが回民で約千五百名ぐらいいたようである。以上が石羊銀廠の生産構造である。他郎金廠を「臨匪」が占踞したのち、回・漢廠商は廠委崔紹宗に保護を求める一方、「辦團自衛」⁽⁵⁰⁾せんとした。ところが、咸豐四年二月、碓長回民馬長年（爐戸を兼業）と街長漢民顏爾安（江西人、著名訟棍といわれた）の間に「口角」毆傷しあう事件がおこった。爐戸を兼業していた馬長年は、顏爾安から鑛を買っていた。従つて顏爾安は、街長であると同時に「自ら資本を投じ」「採掘業を經營」⁽⁵²⁾する「投資者を兼ね」⁽⁵³⁾ていたのである。馬長年は當初顏の資本が乏しかったので彼に低利で資本を貸し與えていた。半年たらずで顏が二、三萬の利を得たので、馬は利息をあげて資本の返済を迫り衝突にいたつたのである。事件は顏爾安と同郷の「江幫客長」顏亨泰と碓長・課長・爐頭の間で解決され、馬長年兄弟が顔に治療費を支拂うことになった。顔は「鉅款」を要求したが取ることができず馬兄弟との對立を深めたのである。また數日して、馬長年兄弟は漢民王三毛牛にも金を貸していたが、王が返済しなかつたため王の鑛石を奪つてその代償とした。回民廠商は、馬兄弟のやり方が「常與人無理取鬧」⁽⁵⁴⁾ということで漢民との衝突に擴大するのを恐れ、漢民廠商との話しあいで事件の解決をはかったが、馬兄弟のやり方が一方的であつたため解決できず、事件は廠委崔紹宗に訴えられた。崔紹宗は馬長年に賠償を命じたが、その金額については王三毛牛が高額を要求して折りあいがかず、廠委崔と王とが口論する場面もあらわれたのである。王三毛牛と顏爾安とは「回勢大、無奈何」⁽⁵⁵⁾と述べ、他郎金廠を占踞していた「臨匪」を石羊廠に導入しようとしたのである。『滇南雜記』⁽⁵⁶⁾には、爐戸の回民馬開林・馬中貴・馬中榮・馬萬年・馬萬九・馬長年らが、顏爾安と王三毛牛の「鑛旺」なるを知り、多人を帶してその鑛砂を奪つたので、顏・王は碓長馬長年に訴えたが、かえつてなぐられ、それで「臨匪」の應援を求めたといっている。以上の經過をみると問題は「頭人」（七長）集團

内における鑛山利益の爭奪に深いかかわりをもっている。そしてこれら頭人集團には、李本開（課長）・馬金傳（課長）・馬蛟（鑛役）のような廠商（投資者集團）としての存在者がくりこんでいると同時に、馬長年（洞長）・顏爾安（街長）にみられるように自ら爐戸として或は採掘業者として投資者を兼ねるものがあり、「頭人集團全體としては、官側の觸手であるという側面と、私營鑛山の幹部であり、従つて投資者集團と共に經營利潤を追求しなければならぬという側面との、二面性を内在的矛盾として内包していた」といえるのである。かつ、石羊銀廠においては、回民の廠商・頭人・爐戸が比較的優勢であり、頭人集團内にみられる經營利潤の追及により上昇發展をめざさんとする彼らの性格の一端の故に、漢・回の宗教・習慣の差が頭人集團内部の權利あらそいに一影を投ずることが多かったのである。

雲南の回、漢を觀察した賀長齡は「回民耐苦習勞、類多勸積致富、而漢人不善營生、回民遂得重利盤剝」と指摘するよう、回民の積極的な經濟活動は、とりわけ鑛廠において、漢・回間の對立をひきおこす原因にもなりかねなかつたのである。しかし、回・漢の頭人集團内部に生じたこのような對立が、鑛廠内の全ての回・漢對立へとエスカレートしていく狀況にあつたかというところではなく、鑛廠に生ずる災禍を避けんがために、廠商・頭人・爐戸には「漢・回・夷」の「三教」が同結することをも考えていたのである。問題は、回・漢の對立をことさらに煽りたてるものの存在である。すなわち、「外來の遊匪、惟だ彼此事なきを恐れ、或は中より構煽し、或は假冒橫行す、（中略）故に回と民と常に相い闘い、仇なくして妄りに仇あるを云う」といわれるように、雲南各地に瀰漫する遊匪の存在とこれを放置し、ときにはその掠奪に加擔した清朝地方官員の統治こそ問題なのである。

他郎金廠から石羊銀廠に擴大された「臨匪」の掠奪は、咸豐五年（一八五五）以後、臨安府・楚雄府下の漢・回各村へ波及していく。二月、楚雄縣屬六村の回民三百餘戸の燒燬、四月、馬龍廠回民百餘人の殺害、六月、羅川十三村の回民六百八十餘戸、清真寺十一寺の燒燬、十月、鎮南州阿雄鄉八村の回民一千餘人の殺害、咸豐六年（一八五六）一月、楚雄龍頭村回民二百餘戸燒燬。このような狀況のなかで、建水縣の回民李有成は「建水回民檄文」⁽⁶⁰⁾を書き、「臨匪」の暴虐と

「臨匪」と結託することによって統治の失陥を糊塗せんとする地方官の態度を暴露し、「請うらくは民の命を司り、仁義の師を興さん」と、漢・回・夷の蹶起を訴えたのである。ここに、迤南を中心に回民のあらたな運動が再開される。

(二) 運動の性格

「臨匪」の襲撃に抵抗し「保命」のために、回民は、漢民・夷人（少数民族）と共に起ち上ったが、それはどのような組織形態をもって行なわれ、どのような性格を持つにいたったのであろうか。

回民を指導し組織の中心を擔ったのは、「掌教」・「阿洪」（アホン）等の宗教的指導者、「鄉老」に代表される郷村内の實力者、廠商・頭人等の鑛山の有力者である。たとえば、先述の保山縣回民の指導を行なったのは、城内清真寺掌教の木汝和、「大祖師」と稱され回教學問に精通していた陝西回民黃巴巴らである。木汝和は銀兩の調達や、清真寺内に放置してあった「廢礮」を手に入れ、「開花礮店」經營の回民數名から火藥を集めたり、各回民には「防夜鳥槍」を供出させ四十餘桿をそろえるなど武器の調達においても指導的役割をはたした。⁽⁴¹⁾ 武定州大西村の回民三百餘人を統率したのは「大師

兄」馬國棟である。馬國棟はもと河西縣西鄉大白邑の人であるが、その父が回教問學に精通していたので大西村に招聘されたので共に移り住んだのである。おそらく馬國棟の父は掌教として招聘されたのであろう。馬國棟はその子として尊敬され「身材魁梧、膽識俱優」という人材からして指導的地位に就いたと思われる。馬國棟は、十五才から五十才までの壯丁を「兵冊」に登録し、五人を一伍、二伍を一棚、十棚を一營として三百人を三營にわけて組織したのである。⁽⁴²⁾ 新興州の大營村・東・西營村の三村では「大管事」（鑛商）馬敏が、十二才以上の壯丁五百人を組織した。「家資殷富」な馬存喜行二（別名「鄉官」）は銀五百兩、穀八百挑を、文生馬興は穀四百挑を捐出し、「望むらくは大家協力同心し、郷里を保衛し、教門を維護せん」と述べている。⁽⁴³⁾ 更に、先述の石羊銀廠では、回・漢廠商が中心になって「臨匪」の襲來を防がんとし、回民廠商李本開（課長）・金鼎は、回民爐戸馬開林・馬中貴・馬中榮と相談し練丁の招募のために館驛に行き、馬老十・馬

來朝・馬學裕（馬仕大爺）の援助のもとに回民練丁三百餘人を集めた。別に回民客長馬彩らは、回・漢五百餘丁を石羊廠内で組織したし、回龍村・館驛・五山では馬如龍が中心に「漢回夷」八百餘人、馬龍廠では「漢回夷」の三教廠戸が組織された。『滇南雜記』には、このような指導者の肩書にあたるものとして、阿洪・教長・先生・師兄・紳士・村主・鄉官・大爺・頭人・頭目・頭子・大管事・課長・客長・文生・廩生・武生・監生といったものがみえている。回民運動の指導者層がかかる勢力によって構成されていたことは注目すべきである。すなわち、廠商・頭人といった部分は投資者集團、「私的企業家として、彼らなりに、清朝國家權力と對決せざるを得ない本來的な歴史性を擔っていた」とするところ⁶⁴もあがあるが、私はこれら廠商・頭人といった部分も、基本的には清朝國家權力に寄性する勢力であり、國家權力よりする彼らへの保護が十分でないときには、自ら防衛のために國家權力の統制の枠をこえて積極的な活動を行なう點を保持しつつも、一度、國家權力の強い彈壓・懷柔が加えられると、それに動搖し妥協していく一面を濃厚にもっていたものとしてとらえるべきだと考える。また、紳士・村主・鄉官や文生・廩生・監生のような鄉村における有力者（郷居地主）の指導部層における存在は、彼らの反清行動の展開としての抗糧鬭爭の展開を暗示する。回民運動のより大規模な運動への發展過程には、貧窮農民（回・漢・夷を含めて）の抗糧鬭爭の下からの支持や指導者層のもつ動搖性、妥協性を下からつきあげる姿勢が含まれているのである。

雲南は一般に高地であり瘠土が多く土地の生産力が概して低いため、一部平地の富裕な土地はさておき、廣汎な地主・佃戸制の展開よりも零細自作農を中心とし、鄉村内における有力者（郷居地主）と家父長制的つながりを中心に共同體關係により強く結びつけられていたと思われる。そしてこの零細自作農の大部分は貧窮農民であり、土地の生産力が低いこととあいまって多くが他に副業を兼業していたと考えられる⁶⁵。たとえば、臨安府下の回龍村二百餘戸の回民は、水田が非常に少なく、多く「旱地」で農耕をしており、一方たえず石羊・白牛兩廠へ廠丁となって出かけている⁶⁶。また楚雄府下の龍頭村回民二百餘戸は「半農半商」であつたし、旱谷地四十餘戸の回民は、金鼎・金標という兩名が石羊廠の廠商であつ

たのを除き、すべて馬を驅つて「油鹽米炭」を石羊廠に運びこむのを副業としていた。⁽⁸⁷⁾ 彼らは清朝國家權力、とくにその代理人である「書役」、「戸書」からきびしい收奪をうけたようである。咸豐三年（一八五三）九月、姚州では「田賦開徵」にあたり「積怨之民男婦數千人」が「書役を凌辱し」「書差及び官銀匠房屋を拆毀し、其の器物を毀つ」という事件が起っている。⁽⁸⁸⁾ 咸豐四年（一八五四）大理府太和縣では、「新任太和縣周某」が「升糧」ごとに銅錢二文を加えたため回・漢農民數千人が三塔寺に集まり、「鋤頭釘耙」を持って「縣署・六房・典史の家」を打ちこわすという事件が起っている。⁽⁸⁹⁾ 咸豐五年（一八五五）には、開化府で「回匪聚衆抗糧之案」と記された事件があり、同年十一月、蒙化・景東二廳では「刁民鬧糧」事件があった。⁽⁹⁰⁾ 咸豐六年（一八五六）蒙化では「戸書」李懷玉の「加徵折米」にたいし鄉民は「田器」を持って城内の李の家を襲うという事件が報告されている。⁽⁹¹⁾ 道光・咸豐年間には、一方では銀の騰貴が続いており、右の數例に示された清朝官吏の「浮收」は農民にとっては極めて大きな打撃であり、加えて團練の強化による「釐穀」の制や、練頭の「索餉」は、ますます農民を貧窮に追いやることになったのである。そして、貧農の抵抗は、彼らと鄉村にあつて深い關係にあった「郷居地主」をつきあげ抗糧闘争に参加させ、一方「郷居地主」は「臨匪」等の「遊匪」から鄉村を防衛するために貧農を組織するという連環のもとで次第に闘争は反清の傾向を帯びたと思われる。従つて回民運動を支えていく重要な力として貧農の反封建闘争を見落すわけにはいかない。また、楚雄縣屬の沙湯郎・柳楊村・奈二村では「紳富」「殷實者」は楚雄縣城に避難し、鄉村の防衛はもっぱら「外村貧人」によつてなされたという例が示すように眞に闘争を擔うものは、また貧農層であつたのである。⁽⁹²⁾

杜文秀の支配のもとでは「管理軍政條例」に示されたように、きわめて嚴格でかつ禁欲的な姿勢を明確にした軍規が施行されたが、回民の運動にこのような革命性を與え、更に地域的な廣がりやを長年にわたつて保障した力を生みだす一勢力になつた鑛山労働者（砂丁・爐丁）の廣汎な運動への参加も注意せねばならないであらう。砂丁に代表される鑛山労働者の多くは、回龍村・早谷地の例にみられたように、その大部分はいぜんとして農村に基盤を置くものであつたが、「廠分

既多、不耕而食者、約有十萬餘人⁽⁷⁵⁾といわれるように、鑛廠だけに生活のよりどころを求める「耕^{たが}やさずして食う者」も多くいたのである。鑛山労働者には、坑内採掘夫・鑛石運搬夫・坑内通風夫・排水夫・坑内雑役夫などがいたといわれ、彼らは投資者集團に雇傭された頭人集團の一部に監視され、一部は「月活形態」と呼ばれる賃金支拂制の労働過程にくみこまれていたといわれる。まさに、「半プロレタリア」的存在者ともいえるべきこれら砂丁・爐丁の運動への参加は、「めばえたばかりのプロレタリア的要素⁽⁷⁷⁾」を、小規模であいまいな形であつたにせよ、運動に持ちこみ、貧農を中心に郷居地主までまきこんで闘われている抗糧闘争に結びつき、運動を更に一歩前進させたのではないだろうか。このような鑛廠の労働者の数について、岑毓英は、「砂丁招集不易、従前大廠動輒十數萬人、小廠亦不下數萬⁽⁷⁸⁾」と述べ、雲南鑛務督辦唐炯も、「従前大廠率七八萬人、小廠六萬餘人、合計通省廠丁、無慮數百十萬⁽⁷⁹⁾」と述べるように、砂丁に代表される鑛廠の労働者数はかなりの勢力であつたことがわかる。そして、彼らは「現今、久しく工本無し、鑛戸砂丁均しく已^{すで}に業を歇^{やす}し、流れて匪と爲る」といわれるように、多くが運動の擔い手となつて登場したと考えられるのである。

三 回民運動の展開——その二

(一) 同治元年（一八六二）まで

「臨匪」のあいつぐ回民襲撃にたいし、清朝地方官の統治は全く當を失つたものであつた。たとえば、楚雄縣では縣令「王某」は「臨匪」の來襲に備え回・漢二萬餘人を集めたが、「臨匪」の來覆が確實となるや「漢紳」と計り、「遂逐日設宴款待臨安人、唱戲歡迎臨安人」といわれるように態度を豹變し回民攻撃に手をかけた⁽⁸⁰⁾。また咸豐四年（一八五四）雲南巡撫に着任した舒興阿は、「勦回民八百里」の布令を出し、咸豐六年（一八五六）按察使青盛は、「臨匪」や團練に回民の殺害を是認したともいえるべき「格殺勿論」という命令を出している。漢民はこれを「各殺勿論」と受けとり回民を殺

害することが非常に多かったという。また特派された兵部左侍郎黃琮・江西道御史竇堉・左江鎮總兵周鳳岐の回民運動彈壓の目的で組織された團練總局の設置など清朝官員の「辦理失當」は、回民の蹶起をうながした。「臨匪」の連續的な攻撃を受けた迤南では、鑛廠や鄉村の有力者にひきいられて、「各處の回莊、氣を通ずる者多し、つねに同教を庇護するを以て名となす」といわれるように横の連絡を強めながら次第に統一された勢力になっていく。昆陽・海口では武舉馬凌漢が、徵江では掌教徐元吉が、建水では武生馬如龍が、新興では掌教馬德新が中心となったが、次第に馬復初・馬如龍が迤南回民の中心となった。馬德新（字復初）は大理府太和縣（下關ともいわれる）の出身で、咸陽王賽典赤二十一世の賢孫といわれ、かつては天方（メッカ）に巡禮したこともある。回教學問に精通し、その學識中國に廣く知られていたようで、雲南では「老爸爸」と稱され全回民の尊敬を集めていた。この頃「年六旬餘」といわれている。

のち雲貴總督岑毓英は「賊中著名の兇酋、杜汝秀の諸逆あり、倡亂を主謀するは則ち馬德新なり」と述べ、馬德新を「全滇擾亂」の張本人としている。馬如龍（馬現）は、その祖先は江南の出で「殉難九江鎮總兵馬濟美の姪」といわれている。⁽⁸³⁾

若年のときから武藝にすぐれ「陝甘回臨洮の馬」から「少林拳技」を習い、馬德新の教えも受けていたらしい。⁽⁸⁴⁾石羊廠で事件が起るや回龍・館驛・五山の漢・回・夷八百餘人をひきいて蹶起した。迤東では、咸豐三年（一八五三）の東川の回民馬二花が數千人をひきい、馬二花が殺されてからは迤西の杜文秀と呼應した尋甸の馬榮、霑益の馬聯陞が中心になる。

迤西では、咸豐四年（一八五四）巡撫舒興阿が「勦回民八百里」の出示をしたのを契機に動きが活發になる。雲州では蔡發春（七二）が姚州の回民を救援するため江迤の回民を統率し、蒙化では藍（老陝）金喜・七倚謨・馬金保・杜文秀が蹶起した。『續雲南通志稿』には咸豐六年（一八五六）八月、杜萬榮が大理に蜂起し、蒙化の回民と呼應して大理を占領、十月、杜文秀を推戴し「總統兵馬大元帥」とした。『永昌府志』には八月に記す。『方略』では、八月大理失陷後、王を稱しているのは武進士馬名魁であると記すが、迤西の回民の中心になっていくのは杜文秀である。杜文秀は永昌府保山縣の出で板橋街の漢民杜鍋頭（廠商）の孫であるが、回民楊鍋頭の家で育てられ「楊秀」と名のついていた。のち、楊秀の聰明な

るに感嘆した學政が「杜文秀」に改姓させたという⁽⁸⁶⁾。道光二十五年の保山縣の回民虐殺の際、地方官の統治の偏擔を糾彈すべく丁燦庭・木汝科・劉義とともに「赴京上控」した。林則徐の統治の間は四川省の成都にいたが、のち蒙化に入り洋烟の買賣に従事していたといわれる。「杜逆は本馬德新傳教の門徒、迤西に割據し、其の指使を受け、書信の往來絶えず⁽⁸⁷⁾」といわれるように馬德新の教えも受けていたらしい。「總統兵馬大元帥」に推戴されるや革命の志を宣布したと伝えられ、その宣布文には、「可恨妖官、興漢滅回、致互闔之禍連及各屬、民不聊生、本帥一秉大公、連回漢一體、豎立義旗、驅逐韃虜、恢復中華、翦除貪汚、出民水火」のような文句があったという⁽⁸⁸⁾。今や回民の運動は「昔は則ち漢と讐を爲す、今は則ち官と讐を爲す。未だ敢て公然と背叛せざると雖も、ついで官を戕し城に踞し、居心實に甚だ洩り巨し⁽⁸⁹⁾」といわれるように反清の方向性を明確にしてきた。咸豐七年（一八五七）七月、巡撫桑春榮は回民運動の雲南全城への擴大について報告し、「動かざる所は、僅かに普洱・順寧兩府・鎮元一廳のみ⁽⁹⁰⁾」と述べている。

咸豐七年閏五月、馬德新・馬如龍は「漢匪」王升とともに「回・夷」數千人を率い省城昆明の攻撃を行なった。省城は糧道が絶たれ恐慌をきたした。雲貴總督恆春は、六月一日「滇事辦じ難し、死を以て相い報わん」と述べ「自盡」するという事態になった⁽⁹¹⁾。事の重大さに清朝は、四川總督吳振械を雲貴總督に調補し、同時に四川の精兵二千餘名、餉銀五萬兩を急派して省城失陥を食いとめようとし、一方、回・漢の「紳士頭人」を通じて城内の安寧をはかった。更に運動の指導者であった馬德新に「四品頂戴」・「管理雲南清真寺事務」という木刻を賞給して懷柔につとめた。回民運動には、回民・漢民・夷民の三者が参加していたことは前にも述べたが、とくに雲南少數民族の参加は注目し値する。このころ邱北縣では「猥匪」が、開化府では「沙・猥・夷人」が回民とともに蹶起しており、咸豐九年（一八五九）一月、貴州省に近い平彝縣では「猥夷」二千餘人が縣城を攻撃している。咸豐十年（一八六〇）十月、總督張亮基・巡撫舒之銘の報告によると、迤南一圓の少數民族が一齊に回民の「黨與」となっており、その數は二萬餘人にのぼっていると述べている⁽⁹²⁾。

咸豐九年六月、馬凌漢は田慶餘・楊振鵬ら數千人とともに省城に近い昆陽州城を攻撃占踞、十月、迤西の姚州・蒙化の

回民は馬定國の指導のもとに楚雄・鎮南を攻撃、十二月、杜文秀から「偽職先鋒」を與えられた馬三・「大司寇」の漢人廩生李芳園は五、六千人をひき安寧州城を攻撃、回民の運動は漢民、少數民族を含め「三迤響應」の状態に發展してきつた。咸豐十年（一八六〇）四月、回・漢・夷四千餘人が晉寧を攻撃、杜文秀指導下の迤西回民は、「夷民」「漢奸」を「傳帖糾集」し、廣西省に近い廣南府羅平州附近で「粵西髮匪」（太平天國軍）と合流する事態も生じた。

咸豐十一年（一八六一）二月、馬如龍・徐元吉は馬德新を推戴し再度省城へ進撃した。この攻撃に先立ち馬如龍は「曉諭滇垣紳民」⁽⁹⁴⁾を發表し、清朝地方官が組織した團練の練目の一人何自清の暴虐について彈劾した。省城をとりまく富民・羅次・安寧・徵江・昆陽・廣通・呈貢で激戦があり、今や省城の陥落が寸前に迫った。回民軍の銳鋒をかわしきれなくなつた清朝は、署徵江府知府岑毓英をして馬德新・馬如龍を懷柔招撫した。すなわち馬如龍には「臨元鎮總兵」を、馬德新には「二品伯克・滇省回教總伯克」を賞給し、練目何自清は四川省へと轉出させようという大幅な讓歩による招撫政策であつた。同治元年（一八六二）三月、馬如龍はこれを受け省城に入った。馬德新は總督潘鐸にむかつて、自らを「平南王」に封ずよう求めたが實現されなかつた。馬如龍は總兵の銜の上に自ら「統領三迤兵馬大元帥」の稱號を置いていた。また田慶餘は「公局」を置いて、錢糧・稅課・釐金の徵收、文武各官の補缺を公局でなさんとしたが總督潘鐸はそれを認めなかつた。馬如龍は次第に清朝に忠誠を誓ひ回民運動の彈壓者に變節していくが、省城に入った回民軍の多くは、右に見られた如く清朝官員の統制に服さず、統治の實權を掌握していたのである。『滇亂紀略』⁽⁹⁵⁾には當時の省城内部の様子について次のように記している。「回黨民房を佔據し、民女を取る、一時民間競いて相い嫁娶し、また婚嫁の禮を成さず、街市敢て豬肉を售ず、一時無賴争いて回教に投ず、俗に呼んで『假回子』と爲す。（徐）之銘、（馬）如龍を承、至らざる所無し、紀綱掃地せり」。

(二) 同治十二年（一八七三）まで

清朝に歸服した馬如龍は、次第に回民運動彈壓の中心となり、「以回制回」という政策の實行者に仕立てられた。同治元年（一八六二）五月、馬如龍は副將回民楊振鵬を大理に派遣し、清朝に投降するように杜文秀に呼びかけた。（「致杜文秀書」⁹⁶）、杜文秀は「覆楊振鵬書」⁹⁷を書き、それを拒否した。

同治二年（一八六三）一月、杜文秀から「偽職」を受けていた大都督李俊・平東大將軍馬榮は五、六千名をひきい、迤西から派遣された大都督馬士淋・大將軍馬有才とともに省城を急襲した。十五日、總督潘鐸を殺害し、馬德新を推戴して總督を護理させた。馬如龍は迤東の土目梁士美的攻撃に出ていたが急遽省城に歸り馬榮を追放した。馬榮は尋甸に、馬聯陞は霑益により迤東の回民をひきいた。馬德新は總督を辭したが、その舉動は杜文秀に通ずものとして嚴しい監視のもとに置かれていく。省城の一時失陥は、清朝官員にあらためて回民運動の強大さを認識させ、一時は馬如龍にも疑惑の目に向け、巡撫賈洪詔は「以回攻回」はきわめて危険であると上奏している。⁹⁸しかし、總督勞崇光は、馬如龍を前面にたてて「以回攻回」を實行した。馬如龍は迤西鎮壓のためには、まず迤東を鎮撫すべきであると力説し、同治四年（一八六五）二月までに、馬榮・馬聯陞を破った。しかし、かわって昭通には回民鎮潮升が杜文秀の「偽職」を受け、いぜんとして根強い抵抗をみせた。十一月、巡撫林鴻年は運動の鎮壓には「洋槍隊」の必要を痛感し、江蘇巡撫李鴻章のもとから「洋礮隊兵勇」三、四十名を派遣してもらうよう上奏している。⁹⁹この計畫は裁可され李鴻章から總兵李恆嵩らが派遣された。

同治六年（一八六七）、馬如龍は大理攻撃のため兵を東西南北の四路に分けて包圍する策をとりはじめ杜文秀との衝突は避け得ない状態に入ってきた。同治六年（一八六七）一月、馬如龍ら清朝の主力は四路に分れ省城を出發した。六月、巡撫劉嶽昭は迤西一圓における杜文秀軍の勢力について「繪圖貼說呈覽」¹⁰⁰したが、それは別表の如くである。十月、杜文秀は「官軍」をむかえ逆襲に轉じた。東征・西征の「官軍」を破り、十二月「四十餘萬衆」をあげ怒濤のごとく省城を攻撃したのである。¹⁰¹この攻撃にあたり杜文秀は「興師檄文」・「帥府佈告」¹⁰²・「誓師文」¹⁰³を公開した。「興師檄文」では「城鄉紳耆、遠近士民」に呼びかけ「爰に義師を舉げ、以て妖孽を清さん、志は刼を救い民を救うに在り、心は回を安んじ漢を安

別表 同知六年六月，劉嶽昭上奏の迤西の回民運動勢力

根 據 地	指 導 者	軍 勢
楚雄府屬 鎮南州城	安西將軍 杜義	約二千餘人
姚州州城	撫西將軍 馬應良	約二千餘人
姚州分防普湖州判地方	武略都督 羅得勝	約一千餘人
大理府城	杜文秀	僞官匪黨甚多
大理附郭太和縣	大 司 隸 劉綱	} 各一，二千人
大理所屬之上關	中郎將軍 沙國寶	
大理所屬之下關	護勇都督 木姓	
趙州州城	大 司 徒 馬得才	約二千餘人
彌渡通判地方	(賊首匪黨未詳)	
賓川州所屬 平川地方	大 司 平 馬成	約一千餘人
賓川州所屬 瓦塞地方	擬東將軍 布萬全	約一千餘人
雲南縣城	靖虜將軍 侯有明	約一千餘人
鄧川州城	大 司 旅 劉渭	約一千餘人
浪穹縣城	(賊首未詳)	
雲龍州城	大 司 寇 李芳園	約二千餘人
麗江府城	大 司 衛 姚得勝	約三千餘人
麗江縣附郭首邑	智勇都督 劉洵	
鶴慶州城	大 司 政 劉成	約一千餘人
劍川州城	右廣將軍 米維山	約一千餘人
永昌府城及附郭首邑保山縣	大司馬 楊德明・大司戎 馬國春・ 武勇將軍 段成功・懷遠將軍 沙國興・ 威遠將軍 蘇萬科	} 一萬餘人
永昌府所屬之施甸巡檢地方	大 司 空 李國綸	
騰越同知地方	綏遠將軍 侯光美・車騎將軍馬年三	萬餘人
騰越廳所屬之西練地方	征西將軍 柳鐵三	約一千餘人
永平縣城	靖南將軍 安理・中軍參軍 何生春	約二千餘人
龍陵同知地方	平西將軍 馬青	約二，三千人
順寧府地及附郭首邑順寧縣	大 司 征 馬德中	約二，三千人
雲州州城	揚威都督 蔡廷棟・大司軍 馬金寶	約三千餘人
緬寧通判地方	平虜將軍 馬重狗	約二千餘人
永北直隸廳城	前擬將軍 虎應龍・果勇都督 張席	約四千餘人
蒙化廳城	大 司 閫 馬旭	約二，三千人

んずに存す」と述べ、「誓師文」では、「始は滿を鋤^{ほろ}は、次は漢を拊^やす、三は奸を除く」と述べている。また「帥府佈告」では、「此次の出師、滿人我が中夏を奪い、主政すること二百餘年、人民を視^みるに牛馬の如し、性命を以て草木の如す、我が同胞を傷つけ、我回族を滅す、是を以て天討を彰^{あかし}にす、罪まさに得べき有り」と宣布し、「反清の行動を明確にした。同治七年（一八六八）閏四月、城内の回民指導者は動搖し、楊振鵬・田慶餘ら多くが「賊に投じ」、署臨元鎮總兵合國安・守備馬雲龍・軍功馬學林らは「賊に通じたる逆官」として處刑されている。⁽¹⁰⁵⁾この間、杜文秀は大司衡楊榮・大司平馬興堂をして、二度馬如龍に降伏の勧告をした。馬如龍は、「之を總^すぶるに、弟、今日萬も轉ずべからず、既に之を朝廷に歸す、惟^ただ此身朝廷に報答すること有るのみ」⁽¹⁰⁶⁾（覆大司平馬興堂書）と述べ杜文秀への降伏を拒否した。

清朝は、四川省會理から遊撃楊玉科を急派し、羅次・富民へとむかわせ轉じて麗江・鄧川の大理の背後を襲わせた。また、太平天國の鎮壓に活動した粵勇・湘勇の動員と洋式武器によって武裝された「洋槍隊」の強化により省城の失陥をまねがれた。また杜文秀軍の中にも楊威都督蔡廷棟と大司疆段成功の間に内訌があり攻撃に失敗したと述べているものもある。⁽¹⁰⁷⁾以後の數年は次第に態勢のたてなおしに成功した清朝が回民運動を劣勢に追いこんでいく時期である。清朝が攻勢に轉じる中で注目すべきことは、すでに林鴻年らによって要請されていた洋式武器の調達である。同治七年（一八六八）八月、總督劉嶽昭は、兩江總督曾國藩を通じて上海にて「火器」を求め、その代金は江寧藩庫より支出せんことを請うて許されている。⁽¹⁰⁸⁾また廣東からも、洋槍・洋礮・洋藥・銅帽を贈入する計畫をたてるとともに、外國人を招募し「開花礮隊」の教習をさせようとした。この招募に應じてフランス人の「武齡」・「實一」が雲南に来て、同治八年から九年にかけて一年の契約で訓練を行なった。巡撫岑毓英の報告によると、この兩名は「紅廟」の攻撃にすこぶる功があったとし、「武齡」には遊撃、「實一」には守備の職銜を賞給するよう求めている。⁽¹⁰⁹⁾當時、雲南は列強の爭奪の重要地方であり、とくにベトナムからフランスが、ビルマからイギリスが進出の機會を狙っていた。『滇南雜記』には、清朝ではフランスから「快槍」を購買し、一度目は二百桿、二度目は八十五桿を越南經由持ちこんでたと記している。また、杜文秀のもと、大理

にはイギリス人が觸手をのぼしていたが、これら外交關係には今は觸れないでおく。

同治十年（一八七二）九月、總督劉嶽昭・巡撫岑毓英の報告によると迤西の大理・永昌・順寧・蒙化・騰越・雲州・趙州・雲南・永平の九城、東南の邱北・臨安府下の五カ處を除き、清朝は雲南のほぼ全域を克復する。⁽¹⁰⁾

同治十二年（一八七三）一月、杜文秀政權の中心であった大理が陥落した。杜文秀はこれに先立つこと一カ月餘、同治十一年十一月二十六日「服毒自盡」した。回民軍は「偽禁城各門」を死守し、死者萬餘人をだすなど最後まで抵抗の姿勢をくずさなかった。同治十二年の中頃までに、最後の據點となった蒙化・順寧・騰越が陥落し回民運動は終止符がうたれる。「杜逆倡亂以來、流毒一十八載、五十三城を攻陷す、西は則ち四川會理諸州に擾及し、東は則ち貴州興義各屬に竄踞す、蓄髮變服、印を鑄し官を設け、禁城を偽造し、王制を僭規す、燎原の勢、ほとんど全滇を覆す」と劉嶽昭・岑毓英は述べている。⁽¹¹⁾

（二）杜文秀政權

大理によつた杜文秀は禁城を造り、王制をしき、官を設け印を鑄し、蓄髮變服したといわれているが、これをもつて杜文秀政權の實體であるともみなすことはできない。杜文秀政權にはどのような特徴がみられたのであろうか。

同治元年（一八六二）五月、馬如龍の投降の呼びかけを拒否した杜文秀は「覆楊振鵬書」で次のように述べている。「迤西の如きに至りては、回の職を受く者數千、漢の職を受く者數萬、十に八は土司有り、俱に各職を襲す」というように「三教同心、聯爲一體」という回民・漢民・夷民三者の協力が確立していることを強調している。そして、「現在、迤西邊患すでに息む、内政緒に就き、府廳州縣安堵常の如し、土農工商各本業に歸り、同心捍衛、衆志成城、一たび講和を聞かば、紛紛聚訟、敵愾を情願し、和に従うを願わず」と述べ、杜文秀のもとにあっては「衆意すでに定まり」あらためて清朝の統治を受けるに及ばないという意志を示している。回・漢・夷の三者が各々杜文秀政權に参加していた状況を傳え

るものに『杜文秀統屬職官題名錄』・『杜文秀統屬重要人題名錄』・『杜文秀統屬』各大司題名錄』があり、最初のものには漢民の職を受けたもの二百八十四名、回民の職を受けたもの十二名の名がのせられている。杜文秀が迤西の統治について自信をもって述べるにはそれだけの実績があったと思われる。『瑞記書稿摘要第十三本』⁽¹¹⁵⁾には、杜文秀の統治の一端について、「回・漢の宿嫌を解化し、深く共済の團體を結び、屈を受けて服さざるを明曉し、禍福の同に享くを誓許す、課税を釐定し、訟獄を清理す、^(中略)各禮教を修め、相い強迫する無し」と述べている。また、『清咸同間雲南回變紀聞』⁽¹¹⁶⁾には、杜文秀の治下にあつては十八年間「太平景象」を稱したといっている。

更に「永昌府保山縣漢回互鬪及杜文秀實行革命之緣起」には「漢民を優待するを以て政と爲す、所有漢民皆各生業に安んず、漢族中の紳士、舉貢生監、皆以て文職を授け、民事を治理し、軍務を參贊す、かつ明朝の衣冠を改用し、留髮して剃らず、祖國を恢復するの意を表示す、故に迤西の漢族紳士三百餘人、匾額一方を公送す、文に曰く『一人定國』と述べている。同治二年（一八六三）發布したといわれる「杜文秀令」⁽¹¹⁷⁾には、「進伍改制」を願った部下の文武各官の要請にたいし、杜文秀は自ら王制をとる意志はないことを述べ、「改制」については贊同の意を表し、同治三年元旦をもって「改制」舉行のはじめとすると述べている。杜文秀の統治についてやや理想的にすぎることが詳述したものに『辯冤解冤錄』⁽¹¹⁸⁾がある。これには、「學校を設け、修金を備え、以て寒士を養う、耕牛を給し、籽種を發し、以て老農を助く、修造を興し、製作を廢し、以て百工を來らしむ、行店を建て、市塵を肆て、以て商賈を安んず、春秋に孔子を祀り、錢帛もて窮民を濟く、東郊に迎春し、南畝に播種す、回法を犯せば重く加辦し、漢法を犯せば輕減す、地方を委鎮するに、回漢ともに任ず、賓客を招待し、回漢同席せしむ」というように記している。杜文秀が太平天國運動と積極的な關係をもったように思われるが、杜文秀の統治がとくに軍規の點において太平天國におとらない嚴格さをもち、雲南回民運動の一つの到達點を示したものに「管理軍政條例」⁽¹¹⁹⁾なる法令がある。

この法令は咸豐十一年（一八六一）ごろまでに作られていたようである。その内容は（一）「關於帥府執行五條」、（二）「關於

鎮守官吏執行十四條、(三)「關於軍令執行二十八條」、(四)「關於行營執行二十三條」より成立している。(二)の十四條は、税課・錢糧の徴收や詞訟を司る「鎮守官」の服務すべき事項及びそれに違反したときの處罰を明記したものである。そこで「鎮守官」は何よりも「廉潔自持」たることを求められている。注目すべき規定の一部には次のようなものがある。

一、地方税課、舊有例者、方准抽收、不得私加名目、妄自徴收、如土產等類、亦不准勒逼抽收、……

一、府廳州縣各衙内、不須多養閑人、至六房書吏、兩班差役、以及門房簽押各行、須擇忠厚明白者用之、一切猾吏、不准任用、以爲民害、並量其事之輕重勞逸、每月分別等第、給以工食、不准私索民間分文、……

一、地方私款、向來未入公者、須查實開報、如内(向)屬苛派地方者、准給酌量豁免、如不在苛派之列、仍須報入公款、……

款、……

一、地方有妨害弊端、如鎮守官不能革除、使百姓永久受害、無生活之日、該鎮守官實屬尸位素餐、有違上府體恤百姓之致(至)意、一經查覺、或被百姓上訴、記大過一次、……

右に示した數例からもわかるように、これらは舊來の秩序を破壊した上で新しいものをつくりだしたという性格のものではない。しかし、これらは抗糧鬭爭の延長の上にかちとられた成果ではなからうか。清朝官吏の「苛派」や團練の「索餉」に苦しんだ貧農にとって、それらは必ずしも十分に満足できるものといえぬかもしれぬが、少なくとも清朝の統治よりはましであるという點でこれを受けいれたと考えられる。⁽¹²⁾『元謀紀聞』に、杜文秀の德政として「地方の苛派」を取り除いたことを數えあげているのは、このような法例の實行をさしているであろう。

(三)の二十八條のなかには、敵の「銀錢貨物」を得たときは、その多寡にかかわらずすべて軍需に充てること、城鎮村莊で「糧草」を得るときは「踐踏焚化」してはならぬこと、「姦淫搶掠、焚燒民房」の行爲をするものは官兵を論ぜず斬首、兵官が「投誠地方」を経過するとき、みだりに一木一草を動かし、「姦淫嚇詐」すれば官兵を論ぜず梟首、のような軍規がみられる。

(四)の二十三條のなかには、漢・回・夷の三族を一視同仁すべきこと、「廟宇民房」を毀拆するものは斬、兵丁が故意に「牲口を放ち田間の糧食を踐踏」すれば斬、官兵が勢にたのんで民女を強奪し妻とするものは斬、のようなやはり厳格な軍規がみられる。

右のような軍規に支えられて反清の軍事行動をも遂行し得たのであろう。すでに紹介した「誓師文」の冒頭にも、「此次の出師、本より興漢のためなり、戒、濫殺する勿かれ、如し其の境に臨み、如し其の民に遇わば、各まさに明きらかに宗旨を發すべし、但漢回一心を得て、以て國恥を雪がん、是れ至要と爲す」と述べている。このような杜文秀の統治は、混亂のなかにあった鄉村・鑛廠・鹽井に一定の秩序を回復させ、その「仁風」は廣がり、清朝の統治を排して敢て回・漢・夷の三者が杜文秀のもとに結集する體制を固めたのである。

おわりに

以上三章にわたって述べてきたことを要約すると次のようになる。道光末期、雲南省は他の地域においてもみられたように、秘密結社が鑛廠をはじめ鄉村内部にも浸透しており、清朝地方官の統治を排して支配の實權を掌握している場合も多くみられた。とくに、「遊匪」の掠奪を阻止するためにも、漢・回各々、秘密結社や宗教的連帶による結束を強化した。地方官は地方統治の失陥を防ぐために、營兵の不足を團練と勇丁の招募により切り抜けんとした。また、漢・回の紳士・頭人を懷柔することにより、反清運動の勃興を抑えようとしていた。しかし、漢・回・夷をとわず、この時期に強化されてくる地方官吏の彼らへの「苛派」は、貧農を中心に郷居地主をもまきこむ抗糧鬭争を激化させたといえる。加えて、團練の「索餉」は鄉村を更に荒廢させ、抗糧鬭争は更に反清鬭争へと一步進んでいく。一方、銅廠をはじめとする各種鑛山、鹽井の閉鎖は、多量の下層勞働者(砂丁・爐丁)を析出させ、彼らを運動に追いやることにもなった。彼ら下層勞働者は、いぜんとして農村に深いつながりをもっており、完全な形で近代的プロレタリアートでないにせよ、いわゆる

「半プロレタリア」的存在として、運動の中に「めばえたばかりのプロレタリア的要素」をもちこみ、運動を支える重要な役割を果たしたと考えられる。回民運動は、回民に加えられていた差別に反対する思想が根本に流れているが、運動はその範囲にとどまらず、回・漢・夷三者の反封建・反清闘争へと高揚し、迤西大理を據點に杜文秀を中心とする地方政権への樹立にまで至っている。この政權は、抗糧運動の延長上にうち立てられたものであり、そこまで運動をひきあげていたものは、回・漢・夷の貧農を主力とする勢力であった。

回民運動は、列強に支えられた清朝により撃破されたが、その十數年に及ぶ闘争は、同時代の太平天國運動とともに、清末の農民闘争の輝やかしい一ページを記している。

註

- (1) 雲南回民運動をあつかった著書、論文には、矢野仁一『近代支那史』(一九二六、弘文堂)第十八章「雲南回教徒(バンジエー)の亂」、中田吉信「清代におけるムスリムの叛亂」(歴史教育 二二・二、一九五四)、寺廣映雄「雲南ムスリム叛亂の性質」(大阪學藝大學紀要第五號、一九五六)、今永清二『中國回教史序説』—その社會史的研究—(一九五六、弘文堂)一、二、五、六、七章。
- なお、『東洋學報』五二・一に、中田吉信により、王樹槐「咸同雲南回民事變」(中央研究院近代史研究所專刊之三、一九六八)が批評されており雲南回民運動についての内外の研究が指摘されている。
- (2) 『大清宣宗皇帝實錄』、卷一百五十四—九。
- (3) 同、卷二百十四—二十。
- (4) 同、卷一百九十六—十。
- (5) 同、卷三百十一—十七。
- (6) 『林文忠公政書』丙集、雲貴奏稿、「查勘礦廠情形試行開採摺」
- (7) 「飭提馬文昭奏懇緬廳文武官員謀殺回民案被告人證札」、「緬寧回民叩關稿」、いずれも『回民起義』I(中國近代史資料叢刊)所收。
- (8) 賀長齡、「耐菴奏議存稿」卷十一、「拏獲結盟匪棍從嚴懲辦摺」
- (9) 『回民起義』I所收。
- (10) 「雲貴奏稿」、「籌辦永昌哨匪起程日期摺」
- (11) 「永昌府保山縣漢回互鬪及杜文秀實行革命之緣起」
- (12)(13) 「耐菴奏議存稿」卷十一、「拏獲結盟匪棍徒從嚴懲辦摺」
- (14) 同、卷十一、「拏獲邪術回民從嚴審辦摺」
- (15) 「雲貴奏稿」、「審辦倡亂妖匪金混秋摺」
- (16) 『回民起義』II所收。
- (17) 「雲貴奏稿」、「生擒彌渡匪犯審辦摺」

- (18) 『回民起義』Ⅱ所收。
- (19) 「雲貴奏稿」、「查勘礦廠情形試行開採摺」
- (20) 「耐菴奏議存稿」卷十一、「漢回夙嫌未釋亟宜化導片」
- (21) 王大岳「銅政議」(『皇朝經世文編』卷五十一、戶政)
- (22)(23) 里井彦七郎「清代銅鉛礦業の構造」(『東洋史研究』十七
一)
- (24) 『欽定平定雲南回匪方略』(以下『方略』と略)卷二十、福
陞奏言。
- (25)(26) 李星沅「李文恭公奏議」卷十四、「附奏覆陳辦理雲回通
盤籌畫片子」
- (27)(28) 「雲貴奏稿」、「附審辦回民丁燦庭京控案片」
- (29) 『方略』卷一、舒興阿奏言。
- (30) 同、卷十四、潘鐸奏言。
- (31) 岑毓英「岑議勤公奏議」卷八、「截止民兵釐穀請免積缺錢糧
片」
- (32) 「李文恭公奏議」卷十三。
- (33) 『方略』卷一、舒興阿奏言。
- (34) 同、卷六、吳振械奏言。
- (35) 「雲貴奏稿」、「甄別鹽提舉州縣各員摺」
- (36) 『方略』卷二十七、勞崇光奏言。
- (37) 同、卷十二、張亮基奏言。
- (38) 同、卷十四、張亮基奏言。
- (39) 同、卷十一、徐之銘奏言。
- (40) 同、卷十二、張亮基奏言。
- (41) 『回民起義』Ⅰ所收。
- (42) 「雲貴奏稿」、「保山縣城內回民移置官乃山相安情形摺」
- (43) 「永昌府保山縣漢回互鬪及杜文秀實行革命之緣起」(『回民起
義』Ⅰ所收)
- (44) 『方略』卷一、陳慶松奏言。
- (45) 同(43)。
- (46) 同(44)。
- (47) 今永清二、「中國回教史序說」第七章林則徐的回民政策。
- (48)(50) 「他郎南安戰爭續記」(『回民起義』Ⅰ所收)
- (51)(53) 里井彦七郎前揭論文。
- (54)(55) 「他郎南安爭續記」
- (56) 『回民起義』Ⅱ所收。
- (57) 里井彦七郎前揭論文。
- (58) 「耐菴奏議存稿」卷十二、「覆奏兩年辦理回匪情形摺」
- (59) 「李文恭公奏議」卷十三、「附奏查辦緬匪徒情形片子」
- (60) 『回民起義』Ⅱ所收。
- (61) 「耐菴奏議存稿」卷十一、「審辦永昌滋事匪犯摺」
- (62) 「武定事略」(『回民起義』Ⅱ所收)
- (63) 「滇南雜記」(『回民起義』Ⅱ所收)
- (64) 里井彦七郎前揭論文。
- (65) 抗糧鬪爭の多發地域、土地所有關係、階級構成等について
は、小島晋治「太平天國と農民(中)の一」(『史潮』第九十
六號)を参照。
- (66) 「婆兮事略」(『回民起義』Ⅱ所收)
- (67) 「他郎南安爭續記」
- (68) 甘雨「補過齋遺集」(雲南叢書集部別集類所收)

- (69) 『滇西變亂小史』(『回民起義』Ⅱ所收)
 (70) 『大清文宗皇帝實錄』卷一百六十八—二百。
 (71) 同、卷一百八十一—一百八十一。
 (72) 王佩琴「杜文秀革命軍底團結問題」(『太平天國革命運動論文集』所收)の引用を参照。
 (73) 「他郎南安爭鑛記」
 (74) 「回民起義」Ⅱ所收。
 (75) 倪蛻「復當事論廠務書」(『皇朝經世文編』卷五「戶政」里井彦七郎前掲論文。
 (76) エンゲルス『ドイツ農民戰爭』
 (77) 岑毓英「奏陳整頓滇省銅政事宜」(『皇朝經世文續編』卷四九、戶政二六)
 (78) 唐炯奏言、光緒十三年五月『鑛務檔』第六冊。
 (79) 「楚雄丙申抗變事略」(『回民起義』Ⅱ所收)
 (80) 「雲貴奏稿」、「覆奏永昌漢回情形片」
 (81) 「方略」卷五十、岑毓英奏言。
 (82) 「原任湖南提督馬公雲峯傳」(『回民起義』Ⅱ所收)
 (83) 「婆兮事略」
 (84) 「方略」卷三、李培祐奏言。
 (85) 「滇西變亂小史」
 (86) 「方略」卷五十、岑毓英奏言。
 (87) 「永昌府保山縣漢回互鬭及杜文秀實行革命之緣起」
 (88) 「方略」卷五、吳振械奏言。
 (89) (90) 同、卷五、桑春榮奏言。
 (91) 同、卷五、舒興阿・桑原榮奏言。
 (92) 同、卷九、張亮基・徐元銘奏言。
 (93) 同、卷九、張亮基・徐之銘奏言。
 (94) 「回民起義」Ⅱ所收。
 (95) (97) 「回民起義」Ⅰ所收。
 (98) 「方略」卷二十一、賈洪詔奏言。
 (99) 同、卷二十六、林鴻年奏言。
 (100) 同、卷二十九、劉嶽昭奏言。
 (101) 「咸同野獲編」(『回民起義』Ⅰ所收)
 (102) (104) 「回民起義」Ⅱ所收。
 (105) 「方略」卷三十三、宋延春奏言。
 (106) 「回民起義」Ⅱ所收。
 (107) 「滇垣十四年大禍記」(『回民起義』Ⅰ所收)
 (108) 「方略」卷三十四、劉嶽昭奏言。
 (109) 同、卷四十一、劉嶽昭・岑毓英奏言。
 (110) 同、卷四十三、劉嶽昭・岑毓英奏言。
 (111) 同、卷四十七、劉嶽昭・岑毓英奏言。
 (112) (116) 「回民起義」Ⅱ所收。
 (117) 『近代史資料』一九五八年第三期。
 (118) 「回民起義」Ⅰ所收。
 (119) (120) 「回民起義」Ⅱ所收。